2020年9月27日 久宝教会 聖霊降臨節第18主日礼拝

メッセージ「残りものにも福がある」　　牛田 匡 牧師

聖書　エフェソの信徒への手紙　3章14－21節

９月も残り僅かとなり、日中の暑さも和らぎ、涼しい風が感じられるようになって来ました。先週の４連休には「GoToキャンペーン」で旅行された方々もいらしたようですが、全国的にも、また全世界的にもまだまだ新型コロナウイルス感染症の収束は見えず、町の中ではマスク姿が当たり前で、マスクをしていない人を見かけると、却って違和感を感じるようになってしまいました。

先日、聞いた話では、コロナ禍での企業の倒産や、職員の雇い止めによって、失業者が全体で８％くらいになっているとのことでした。日本で公表されている「完全失業率」は、低く計算されているそうですので、実際にはもっと多いかもしれません。労働人口のおよそ１割近くの方が職を失っていると考えると、それは大変大きな規模ですし、たとえ今はまだ身近には職を失った方に気付かなくても、これから目に見える形でどんどん現れて来るのではないかと思います。仕事を失い、衣食住にも事欠いて、自分の居られる居場所も失くしたとしたら、どれだけ辛くしんどいことでしょうか。「自分には生きている価値が無い」と思ってしまうかもしれません。

就職活動で、採用試験をいくつも受けるけれども、全然採用されず、不採用が続くと、自分がまるで「売れ残りのバーゲン品」のように感じると言った人がいました。バーゲンセールの会場には、沢山の商品が並べられたり、山積みにされたりして、そこに大勢のお客さんがやって来て、バーゲン品を買って行きます。自分の隣の商品も次々と買われて行きます。自分も沢山の人々の手に取られて、ジロジロと眺められるものの、最後はいつも棚に戻されてしまいます。いつしか周りの仲間たちの姿は消えていて、売り場にはポツリと自分だけが残っている……。そのように、誰も自分を必要としてくれないと思う時、まるで自分には価値がないように感じてしまうかもしれません。しかし、人間の価値というものは、誰か他人から選んでもらうことによってのみ、生じるものなのでしょうか。

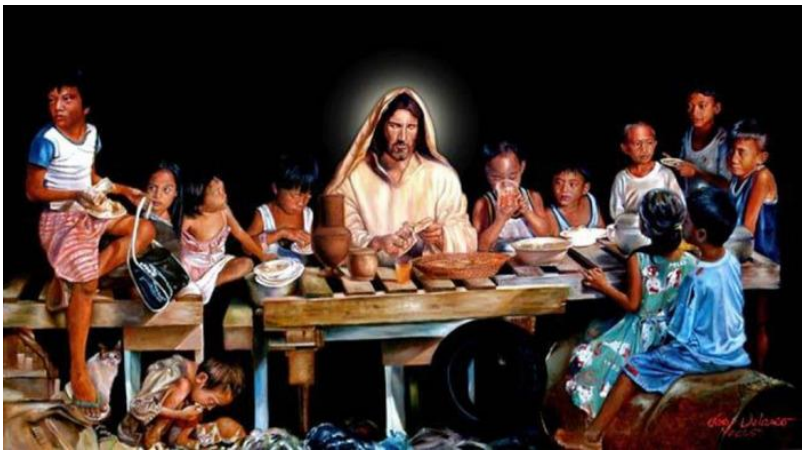
今日の「招きの詞」（コリントⅡ6：16）には、私たち一人一人が神の神殿であり、神様が私たちの中に住み込んでいて、生きていて下さるとありました。神様はどこにいるのか。それこそ聖地巡礼で、有名な町の由緒ある

大きな神社やお寺、大聖堂に行けば、そこに神様はおられるのか……。そうではなくて、たとえヨレヨレになって売れ残ったバーゲン品のようであったとしても、他でもない私たち一人一人の中に、神様は生きていて下さるのだと約束されています。

「エフェソの信徒への手紙」の言葉も同様です。この手紙は、当時の教会におけるユダヤ教徒から改宗した「ユダヤ人キリスト教徒」と、異なる宗教から改宗した「異邦人キリスト教徒」との間の対立や確執などの問題に対して、書き送られた手紙だと考えられていますが、要するに「ユダヤ教伝来の律法を守っているかどうか」ということは関係ない。キリストの愛、神様の力は全ての人に開かれ、与えられている、いやキリストが私たちの内に生きて下さっている、ということを述べています。

17 節には「あなたがたの信仰によって、キリストがあなたがたの心の内に住んでくださいますように」という言葉がありますが、これは「私たちの信仰によって」ではなく、神様の方が主体、動作主として「神の人間への信頼によって、神があなた方の心の内にキリストを住まわせて下さいますように」とも訳すことが出来る言葉です。そして頼りない私たち一人一人の信仰に拠るよりも、むしろ神様が主体として心の内に住んで下さると理解する方が、相応しいのではないでしょうか。

そして神様、キリストが私たちの心の内に住んで下さることによって、私たちがその広さ、長さ、高さ、深さという、人知を遥かに超えた神様の思いを知る、その中に共に生きることが出来るように変えられて行きたいと願います。「他人から選ばれ評価されることによって、私には価値がある」のではなく、「私たちと共に生きて下さっている神様、命を与え生かして下さっている神様が、私の内にいて下さっているからこそ、私には価値がある」。その事実に気付けるようでありたいと思います。



今日は 2 枚の絵を紹介します。一つ目はフィリピンのストリート・チルドレンと一緒に食事をするイエス様の絵です。西洋絵画に描かれることが多いイエス様ですが、アジアの子どもたちの中に

描かれているので、この絵は印象に残っていました。この絵をよく見ると、子どもたちの人数は 12 人ですし、この横長の食卓を見ても、あの有名なレオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」をモチーフにして描かれたということが分かります。この絵を書いたのは、フィリピンの画家ジョーイー・ヴェラスコ（Joey Velasco・1967?－2010）で、この絵の題は「希望の食卓」というそうです。路上で生活する貧しい子どもたちが食事をしている真ん中に、見るからに神様と分かるような白くきれいに輝くイエス様がいて、パンをちぎっている……。イエス様、神様は一体どこにおられるのでしょうか……。この絵を見て、私が思い出したもう一枚の絵があります。

それがこちらの版画ですが、これはフリッツ・アイヘンバーグ（Fritz Eichenberg 1901－1990）の「炊き出しの列にならぶイエス」です。釜ヶ崎のいこい食堂の壁にも掛けてありますが、イエス様は炊き出しを配る側ではなくて、炊き出しを受ける側におられます。仕事を失い、炊き出しの列に並ぶことによって、その日の食事にようやくありつける、という大変な苦労をされておられる方々の間にイエス様はいて、人々の苦しみを共に担っておられるという絵です。こちらの版画を思うと、先程のヴェラスコさんの「希望の食卓」は、如何にも「やらせっぽい」と言いますか、「貧しい子どもたちにパンを分けてあげる優しいイエス様」というような典型的な絵だと感じて、私はあまり好きではありませんでした。

しかし、実はそうではありませんでした。この絵を描いたヴェラスコさんは、2010 年に 43 歳で亡くなっていますが、彼は生前この絵をコピーして、モデルとなった子どもたち一人一人に、お礼としてプレゼントしていたそうです。その時に少年の一人が彼にこう言ったそうです。「この絵はね、僕たちがイエス様に食べ物を分けてあげているんだよ。イエス様はとってもお腹が空いているんだよ。イエス様なのに、かわいそうでしょ。だから、食べ物をあげているんだよ」……。実際にヴェラスコさんがどのような思いでこの絵を描いたのかは分かりませんが、この絵に描かれた一人の少年はイエス様をそのように理解していました。

ストリート・チルドレンは、社会の犠牲者として、社会の片隅に追いやられています。ですから私たちは、そのような子どもたちを助け守らなければならない。だから「イエス様、どうかパンを与えてください」と私たちはいつも祈ります。私たちはそのように一方的に思い込んでこの絵を見ていましたが、当事者の子どもたちの目から見たら、全く逆だったわけです。イエス様こそ飢えていて、路上で生活する貧しい子どもたちがイエス様に食事を分けていました。思い返してみると、「5000 人の共食」の場面でも、最初に自分の持っていたお弁当、５つのパンと２匹の魚を提供したのも、一人の子どもでした（ヨハネ６：1－15)。

神様はどこにいるのか。神様はゆとりがあって他人を助ける側ではなく、今苦しさの中にあって他人から助けられる側にいる……。私たちは「売れ残りのバーゲン品」になる前に、すばやく売れてしまうこと、他人から評価され買ってもらうことが良いことだと言われて育って来ています。そのようになるのが「勝ち組」であって、いつまでも売れ残っているのが「負け組」だという価値観の社会に生きています。そして、そのような「勝ち組」になれることを、神様のおかげ、ご利益、祝福だと理解して来たのではないでしょうか。

「残りものには福がある」という日本語のことわざの由来は分かりませんが、他人が取った後に福が残っているというのは、聖書の伝える価値観とも通じるものがあります。ヘブライ語聖書を眺めても、古代イスラエル民族の「残りの者」への祝福、希望の預言が何度も語られています（イザヤ 11：11，16，28：5，46：3)。一見すると、神から見放されたような、売れ残ってしまったような、苦しい状況の中にこそ、神様は共にいて下さっている。神様は助ける側ではなく、むしろ助けられる側にいる……。

「残りものにも福がある」。今、私たちの周りで「残りの者」とは、どこにいるどなたのことでしょうか。私たち自身のことでしょうか、それとも周りにおられる人たちのことでしょうか。イエス様はどこにおられるでしょうか。今日は礼拝の後、毎月行って来ている釜ヶ崎の方々のために「おにぎり作り」を行います。本当なら誰も、炊き出しやおにぎり配りの列になんて並びたくないというのが、当然の思いでしょう。それに対して、今は他の方法を取ることが出来ない私たちの限界を覚えつつ、イエス様の歩みに従う者へと変えられて行きたいと願っています。